

里地通信 2001・12

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋Y Kビル6階（財）水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@nifty.ne.jp ホームページ：http://member.nifty.ne.jp/satochi/

ぼくとわたしの春夏秋冬 体験画用紙ブックできました。



色々な地域の子どもたちに接してふと気づくことは、全国どこへ行ってもファミコンとテレビで遊んでいる子どもの姿です。これでは地域の自然や文化がますます壊れてしまうし、子どもたちの心が決して健やかに育まれそうにないという不安感から、おじいさんから孫へ体験を継承させる体験画用紙ブックをつくりました。この本はわが家の子育ての春夏秋冬であり、僕自身の子ども頃の体験記です。（竹田純一）

以下は、「春夏秋冬」の挨拶文です。

僕が生まれた40年前、お父さんお母さんは、色々な遊びを僕たちに教えてくれました。

- ・どの木にカブトムシやクワガタがいるか
- ・どうすればサカナがいっぱいとれるか
- ・つり竿やソリの作り方、木の道具やおもちゃの作り方
- ・赤青黄緑の木の実のありかや花の首飾りの作り方
- ・おしろい花のお化粧、色々な葉っぱの色水とか

水たまりと小川、秘密の隠れ家、学校の裏山、神社の森。むちゅうで遊んでいると、たくさんのがわかってきます。僕たちに、好き、嫌い、怖いがあるように、昆虫やサカナたち、植物や木にも好き嫌いがあります。水辺に強いとか弱いとか。

葉っぱの中には、薬になる葉っぱや、おいしい葉っぱ

もあります。生き物たちだけではなく、土や砂のことをよく知っているといひ泥ダンゴが作れたり、遊びもより楽しくなります。

この本は、僕が子どもの頃に遊んだ身近な自然の豊かさ多様さを少しでも多くの子どもたちに知ってもらうにはどうしたらいいか。また、三千年くらい昔から続いてきた地域の暮らしや文化、人と自然が織りなすさまざまな智恵をおじいさんおばあさんから、孫の代に引き継いでもらいたいという願いで作りしました。

この画用紙ブックで、塗り絵をしながら、昔の遊びを子どもや孫に伝えてください。おうちで、そして、子ども会や、子どもエコクラブなどで、地域のおじいさんやおばあさんとともに、一緒に楽しんでいただければ幸いです。

画用紙ブックの注文方法

郵便局備え付けの振込取扱票に、送付先の住所、氏名、電話番号と「春夏秋冬」の注文冊数を記入の上、書籍代金（500円）と送料（250円）をお振り込み下さい。送料は何冊でも250円のみです。例えば、10冊の場合、500円×10冊+250円=5250円となります。

口座番号：00650-1-0011082

加入者名：月布施郵便協力会

第15回目イオングループ里山保全活動

冬の田んぼに水を張り、 ガンの保護と農業の共生を めざす多様な活動

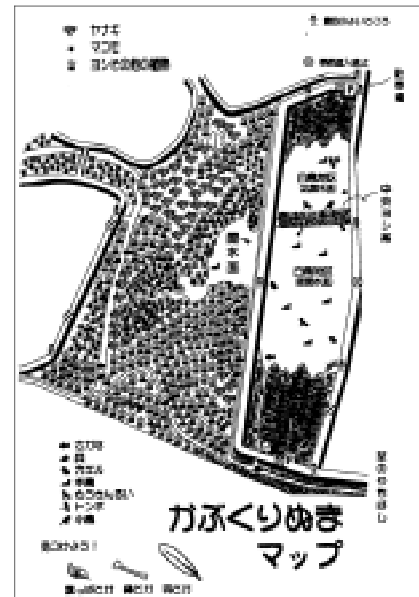
平成13年11月17日～18日
宮城県田尻町蕪栗沼と白鳥地区

協力：蕪栗ぬまっこくらぶ 日本雁を保護する会

ガンのねぐら入り

高く澄み渡った初冬の青空に、太陽が沈みかける夕ぐれどきの1時間。ざわめくような鳴き声が、四方八方から聞こえ始めます。見上げれば、懐かしい言葉通りの雁行陣(がんこうじん)が、頭上を行き交っています。幾度となく上空を群れ飛び交った次の瞬間、一瞬にしてホロッ...っと雁行がほつれ、落ち葉が沼に舞い落ちるかのように着水する雁のむれ。寒さに耐え夕闇の湖面を見つめていないと見られないこのシーンを「落雁(らくがん)」と呼びます。

宮城県北部にある約100ヘクタールの蕪栗遊水地とその周辺にある田んぼは、北方約8キロにある伊豆沼とあわせると、日本に飛来する雁のおよそ80%が越冬する希少な地域です。9月頃から翌年の5月初旬頃まで、この湿地を水鳥たちがねぐらとして活用しています。現在の雁の数は2万羽。小さな湿地に集まるガンのむれは、壮大なものがあります。ガンは、かつて日本各地に飛来していましたが、湖沼の埋立や餌場の分断、狩猟により生態数は激減しました。1980年以降、保護策によって羽数は増えましたが、生息地の環境は改善されず、現在では宮城県北部の湖沼への一極集中化が問題になっています。ガンにとって必要なのは、安全なねぐらを確認できる広くて浅い沼と餌場となる水田のセットです。カモやハクチョウと比べると越冬できる自然環境は、この点では壊滅的だと言わざるを得ません。ガンは、豊かな湿地環境とその生物多様性を象徴する鳥なのでしょう。



出典『蕪栗沼ガイドブック2000』 蕪栗ぬまっこくらぶ

ヨシ刈りと小屋づくり

蕪栗沼の開水面は、渇水期の冬の場合、湿地全体の10分の1程度で、水のないところは、一面マコモやヨシなどの湿原になっています。このヨシを刈ることで、開水面を保全し、刈ったヨシを使って、マガンや白鳥の観察小屋を建てました。

現場で指導してくださった蕪栗ぬまっこくらぶの戸島さんから、ヨシを刈る二つの理由を教わりました。一つは陸化を防ぐこと。ヨシの地上部は毎年枯れるため放置すると堆積し土になり、次第に柳が生え陸化してしまいます。もう一つは水質浄化機能を維持すること。沼には農業排水が流入します。ヨシは富栄養化の原因である窒素やリンを吸収しますが、刈り取りを行わないと吸収が悪くなります。かつては、屋根への利用や野焼きなど農家の手で管理されていましたが、それがなくなった現在、湿地を保全し遊水地機能を維持するためには、刈り出して運び出す必要があります。

現場は、沼の開水面の近く。生物たちのすみかに、一般の人が誤って近づかないように、葦原の中を曲がりくねった道を作って開水面の近くにたどり着きました。葦の高さは1年で4～5mに成長します。この長いヨシを草刈機で刈り、刈りながらヨシを集め、ヒモで束ねて、沼の外まで運び出します。ヨシは長いだけあって、うまく刈り進むのにコツが必要です。約100平方メートル程刈ったところで、軽トラック二台に載せ観察小屋予定地まで運びました。



このヨシで、警戒心の強い水鳥たちを観察するときを使う目隠し小屋を作りました。材料は木と竹、藁縄と麻ひも、そしてヨシだけです。覗き見る前面には、ヨシ簾を手で編んでとりつけました。

冬期湛水水田で農業との共生を実現

ガンは春からの渡りのため、好んで穀物を食しエネルギーを蓄えます。以前は刈り取り後に棒がけしている稲穂をついばむことから、農業者には害鳥扱いされていたようです。しかし今では、水鳥の生態を活用して有機無農薬栽培を行うことで、お米に付加価値をつけ、生き物・自然との共生を目指す取り組みが地元農家で行なわれるようになりました。これが冬季湛水水田プロジェクト、冬の田んぼに水を張りガンや白鳥を呼び戻す取り組みです。

冬の田んぼに水を張ると、白鳥地区で実証されているように、水鳥たちの生息環境が復元してゆきます。が、鳥の側だけでなく水稲栽培にもメリットをもたらします。



一つは、鳥が落ち穂といっしょに雑草の種子を食べてくれることで除草効果が高まること、もう一つは鳥の糞によるリン酸の施肥効果が高まることです。さらに、翌春の田植えまで水を張ったままにしておき、田に耕耘機を入れずに、不耕起で栽培すると、サヤミドロやランソウ等の藻類がふえます。この藻類の遮光作用によって抑草効果が働き、窒素固定による施肥効果、光合成による溶存酸素増加などの効果もあります。既に実践型の研究者によって効果が実証され、「雁」の文字（人と鳥が同じ屋根の下にいる）をモチーフに、付加価値を高めた米として普及が始まっています。

今回、実践者の一人である小野寺さんの田を視察に行きました。

<小野寺さんのお話>

田尻生まれ田尻育ち。4年前から実験的に冬季湛水水田に取り組み始めました。子どものころは、田んぼは湿

田だったため冬も水を張っているのが普通で、よくスケートをして遊んでいました。しかし増産のため乾田化が主流になりました。これでお金は入るが、引き換えにこの土地の財産を失ってきてしまいました。昔のようにするにはどうしたらよいかと考え、冬期湛水水田の取り組みをはじめました。

はじめは田植えのときに機械が沈まないようにと、ガンが発ってから一旦田を乾かしていました。しかし、水をいれたままのほうが良いということがわかり、来年はそのまま田植えをする予定です。不耕起でも冬季湛水ならば普通の田植え機でできます。水を張ったままドラム藻、サヤミドロが窒素を固定するので翌年の肥料になります。化学肥料を断ち切ると微生物などの生き物の利用法がいろいろあることに気づきます。

仲間とは「自然環境共生会」というのを作りました。田と川がつながっていないので、田の中に池を掘って稲刈りで水を抜いた時の生き物の避難場所にしてあります。今年は3割減反を利用して田の一角を80センチ掘り、鯉を放しました。来年までどれくらい生き残るか試験中で、うまくいけば広げようとしています。



ほ場内のピオトープ

田にはまだ水が入っていませんでしたが、減反ピオトープを視察しました。田の一角を掘り下げてあり、そこだけ水があって干潟のような状態になっています。ザリガニの残骸と鳥の足跡（サギ？）がありました。ドジョウなども土にもぐっていました。

印象的だったのは、「一旦化学肥料を断ち切ると微生物などの生き物の利用法がいろいろある」という話でした。農業は、自然を壊しもするし、守りもします。どちらに

なるかは人間次第ですが、自然を抑えつけるのも人間が我慢するのではなく、自然の力をうまく利用することで、人間もより大きな恩恵を授かることができるようです。助成制度のようなものがなくても自ら取り組む人がいれば、道は開けていくように思いました。

日本ガンを保護する会では、仙台方面に冬季湛水水田のネットワークを広げ、ガンの越冬地を増やすとともに、環境共生型の農業の普及と啓発をはかり、その生産物の流通を目指しています。この取組は、田尻町を越えて、環境創造型農業の一つとして、これからさらに広まっていく可能性を秘めています。

治水と自然と農業の共生を目指す

（参考資料：『蕪栗沼の環境保全と農業の共生をめざして』蕪栗ぬまっこくらぶ）

蕪栗沼はもともと北上川の自然遊水池でしたが、歴史的な河川改修により面積は4分の1程度になり、周辺は干拓され水田になりました。しかし、地盤が低く増水すると逆流水を受けて4～5メートルも水位があがるため洪水の常襲地でした。1980年頃からは、増水時には「越流堤」を越えて周辺の水田地区に貯留するしくみとし、沼とそれらの水田をあわせて「蕪栗沼遊水地」として管理されています。

この沼の活用をめぐるのは、開発か保全かで激しい論争がありました。昭和50年代初頭の全面浚渫（掘る）計画の際には地元農業者の強い実施要請がありましたが、当時の町長が同意せず浚渫を逃れました。その後、鳥獣保護の働きかけがありましたが、地元農業者からは鳥は稲を食害する害鳥と捉えられていたため、「人か鳥か」の世論に押され保護区指定には至りませんでした。

5年前（1996年）、再度、県が沼を全面浚渫するとの計画が表面化しました。これに対し自然保護団体と地元農業者の一部が反対し、専門家や議員も交えて蕪栗沼探険隊の集いを実施、豊かな生物相と湿地環境を確認しました。その後議会でも訴え、ついに浚渫撤回を勝ち取りました。以後、治水と自然、そして農業の共生を目指して、行政、自然保護団体、地元住民が関わって組織が生まれ、さまざまな取り組みが始まりました。

特に、水田だった白鳥地区に水を張って湿地に復元したことにより、水鳥をはじめたくさんの生き物が戻ってきました。

・蕪栗沼遊水地懇談会

宮城県河川課は自然保護団体（日本ガンを保護する会）の要請を受け、遊水地の管理に関する話し合いの場を設置しました。ここでは学識者、地元住民、農業者、自然保護団体、行政が円卓で話し合い、本音の議論を通して遊水地の管理方法を決定しています。

・蕪栗ぬまっこくらぶ

上記の蕪栗沼探険隊はその後も続けられ、その実行委員会が発展して保全団体「蕪栗ぬまっこくらぶ」が誕生、現在、NPO法人となっています。ぬまっこクラブでは、湿地保全のための作業をはじめ、生物調査や観察会、環境教育を実施、また各種シンポジウムの実施・参加など普及啓発とピーアールに努めています。

今回の里地里山保全活動は日本ガンを保護する会と蕪栗ぬまっこくらぶとの協力により開催しました。

「パートナーシップ」のありかた

蕪栗ぬまっこくらぶのもとになった蕪栗沼探険隊を最初に呼びかけたのが、日本ガンを保護する会会長の呉地正行さんと、当時白鳥地区土地改良区理事長だった千葉俊朗さん（現ぬまっこくらぶ理事長）です。呉地さんはガンの専門家ですが、鳥を守るには鳥だけを見てはだめで、鳥を守る環境を守らないといけない、ということで、水田の保全にウエイトを置くようになってきたと

のことでした。ガンのこと、沼のこと、冬季湛水水田のこと、組織の成り立ちなど実にいるいるなことを教わりました。千葉さんは、呉地さんとの出会いを機に考えが変わり、自然との共生の道を歩んできたそうです。自然を壊してきたわれわれが自然を復元しその大切さを蕪栗沼から発信したいと語っています。

「蕪栗沼遊水地懇談会」では、自然保護団体、地元農家、行政、研究者の委員が円卓を囲んで本音で話し合い、2000年に管理計画を策定しました。その中には自然保護団体や地元住民の意見も反映されているそうです。ヨシ刈りをする場所や白鳥地区を環境教育に利用するなどの管理・運営方法も話し合いで決めていきます。複数の立場の人や機関がパートナーシップをとろう、ということはよく聞かれます。しかし、そのパートナーシップはしばしば「役割分担」だけになってはいないでしょうか。行政はカネを出す、研究者は調査をする、業者は施工をするなどです。蕪栗沼遊水地懇談会のように、一つの事業を行うための意志決定機関において、様々な立場の人が対等に意見を出し合って計画を策定している例は少ないと思います。ただし最初からうまく行っていたわけではなく、この段階に至るまでに、いろいろな工夫と苦勞を積んで、この情勢を自分たちで作り上げてきたということでした。

実際の活動内容はもちろん、組織のつくりかたや運営、そして運動の広げ方など、学ぶところがまだまだたくさんありそうです。



第16回目イオングループ里山保全活動

あやべ 里地たんけん隊

平成13年11月23日（金）～25日（日）
京都府綾部市

綾部市

綾部市は、京都府中部、奥丹波に位置し、里の標高は60m程度、由良川の支流が流れ、田園風景の広がるのどかな地域です。京阪神からほど近く、田舎暮らしへの志向が強まる中、染色家や陶芸家など、すでに三十人におよぶアーティストが移住しています。衣類メーカー・グンゼの発祥地であり、市内では工業団地も建設されるなど、商工業の発展を進める方向と、田園風景や自然、文化を活かしていく方向との二つの方面で前進を図っています。

里山ねっと あやべ

地元パートナー「里山ねっとあやべ」は、21世紀の綾部の里山をデザインしようと設立されました。『里山力』（豊かな自然、美しい里山的風景、ランドスケープなど）と『ソフト力』（多様な里山文化、経験や知恵、芸術文化など）と『人財力』（夢や想い、志など）の『3つの力』を結集し、オンリーワンのまちづくりを目指し、21世紀の生き方、暮らし方（里山的生活）を探求・提案しています。

拠点があるのは、綾部市の西端、福知山市と接する豊里西地区で、丹波山地に囲まれた山あいの盆地です。この地区の廃校となった豊里西小学校の校舎が、里山ネットあやべ（綾部市里山交流研修センター）です。

田舎暮らし初級ツアー

今回のイオン里山保全活動は、この里山ねっと・21世紀の生き方、暮らし方を考えるためのあやべの田舎暮らし初級ツアーとのドッキングで開催しました。

キーワードは、「地元学」と「自分探し」です。「地元



学」は、6月に京都の環境市民の講演会で里地ネットワークの竹田が行った地元学の講義がもとになりました。「ないものねだり」ではなく「あるものさがし」を通して豊里西地区の風土や生活文化を見つめなおし、この地域が持つ『3つの力（魅力）』を確認し、21世紀の暮らし方を考えようというものです。もう一つのキーワード「自分探し」は、里山ねっと・あやべからの、「他火（たび）」の提案です。『旅はもともと“他火”。他者に火（愛や慈しみ、ちから、勇気...）をいただきながら歩行を進め、世界を自分を発見（ディスカバー）する文化的なしかけでした。』その“他火”の舞台が、地元学、民泊、農作業体験、草木染めを含む今回のツアーです。

参加者は、田舎暮らしに関心のある夫婦、子どもに里山での楽しみを経験させたいという家族連れ、癒しを求める女性、以前の綾部での活動を機に精神的疲労から立ち直り新たに歩き始めた女性、農村との関わりを求めて今後の仕事や生き方を模索している女性などの19人で、地元の方々とボランティアスタッフを加え約50人で行われました。

1日目と2日目は、地元学（「里地たんけん隊」）と民泊した農家での農作業体験や散策を行いました。3日目は、綾部に移住して来られた染色家の指導で草木染めを行いました。

里地たんけん隊

小畑町、鍛冶屋町、小西町の大きく3つの地区（集落）に分かれて「里地たんけん隊」を行いました。班のメンバー構成等により、本格的に調査を行った班と子どもたちと散策して里の良さを発見する班など、趣が異なりました。

霧 - 空気の静けさ -

参加者がみな共通にびっくりしたのは、霧です。朝、外を見ると空は真っ白、目の前は白くモヤがかかって、霧の深いところでは10m先が見えないほどです。10～12月頃毎日のように出るそうで、午前11時頃になってようやく晴れてきます。この霧が、丹波の黒豆（この地域では「紫頭巾」という品種）をおいしくするといいます。小畑町チームは、野焼きの煙が20メートル上がったのち、その形を変えずに平行移動してたなびいていく様をみて、霧の一因ともなっている盆地特有の静かな空気の流れを発見しました。

また、霧は昼近くによろやく晴れ、濃いほど天気が良いので、霧が晴れるときの風景は、明るい光が徐々に霧を透過し山や木々の姿が少しずつ霞の中に浮かびあがってきて、何とも言えない美しい風景でした。

水

豊里西地区には、ため池がたくさんあります。小西町チームでは、山の麓のたくさんのため池と、ため池の水を有効に使うための複雑な用水路、手作りで工夫を凝らした水路、排水を再度池に溜める利用法、そのための村ぐるみの水管理などについて話を聞き、この地域での自然の中での人々の暮らしのあり方を学びました。

鍛冶屋町チームは、山のふもとの防火貯水槽（山水を貯水）から、オーバーフローをため池へ注ぐようにしている水路を見せてもらいました。ため池は、鍛冶屋町の田を潤す農業用水です。「防火貯水槽」は他にもあちこちの山の麓にありました。また、飲み水を汲んだという湧き水の小さな池もあり、山からの絞り出る水を大事に

大事に使ってきたことが分かりました。

様々な里の豊かさ

そのほかに、小西町ではお茶の栽培と加工、“株うち”“組うち”という集落の相互扶助組織、鍛冶屋町では伝説や民話、子どもたちも楽しめる散策路、等などを調査・探検し、見つけたもの、それについて聞いた話を資源カードにまとめ、地図に記入し、拾ったツルや木の実などの実物でリースを作ったりして、この地区のさまざまな豊かさを共有しました。

草木染め - ご近所の庭の素材で

黄色系はくちなしの実、オレンジ系は枇杷の枝と葉、青緑系はクサギの実。小畑地区の古民家に移住して来られた染色家、森口夫妻から、身近な素材を使っでの草木染めを教わり、各自2枚の綿のコースターの染色を楽しみました。絵柄をいれ、素材を煮て染液をとり、液にコースターをいれて煮ます。途中、くちなしはミョウバンの媒染液、枇杷は椿灰からとった媒染液を使いますが、クサギは媒染液が不要な特殊な素材だそうです。できあがったものは、思い思いに描いた里の風景や葉っぱなどの模様が浮かび上がり、とても素朴な色合いに仕上がりました。

森口夫婦は、京都市内で染色をしていましたが、生の素材を手近に入手できる環境を求めて移住してきたそうです。森口さんの、「アーティストはある程度エゴイスティックなものだけど、ここに来て草木染めをしていると、上手に染まるのは自分のためではなく、偶然だったり素材によるものだということがわかってきた。それ



茶畑とため池



地元学風景

に素材は周囲の野山やご近所の庭から分けてもらっている。ここに来て、地域の自然や人々に支えられているからできるのだと思うようになった」とのお話しは、とても印象に残りました。

どれもおいしい!

交流会や昼食の際の食材は、地元の旬のものばかり。そしてそのおいしい食材をさらにおいしく料理してくれたのが、ボランティアスタッフの福良夫婦と、小畑町の味噌加工グループ「空山グループ」の皆さんでした。福良夫婦は「素材の顔を見て料理する」という、すばらしい料理人で、前回あやべの活動に参加したのが縁となり、今回は料理担当のスタッフとして大活躍しました。「空山グループ」が作った小畑味噌を存分に使って、いくら食べてももっと食べたくなる、おいしい料理を作ってくれました。

ほっくりした栗が入った絶妙の味付けの栗ご飯、野菜たっぷりのさつま汁、地の山芋を使った麦とろご飯、小畑みそをつけて食べる衣かつぎや風呂吹き大根、大根のカナッペ、大根の皮とダシを取ったじゃこで煮物、という工夫もありました。

農家民泊でできた絆

参加者は、地元の農家に泊まりました。料理や農作業を体験し、どの家でも自家製のおいしいお漬物やとれたての手作りの山里の食事をたくさんいただきました。みな、夜遅くまで生き方についての悩みの相談に乗ってもらったり、またあつく議論をしたり…。ホストとなった地元の方とお世話になった参加者は、楽しかったというだけでなく、交流を超えた強い絆を結ぶことができました。

「行きつけの田舎」に

3日間を追えた参加者からは、地元学を通して発見したことへの感激や、農作業体験の楽しさ、薪ストーブの香り、風景の美しさなどへの感想、そして自分たちを温かく迎え入れてくれた地元の方々への感謝の言葉が述べられました。一方地元の人からは、「風景などは毎日見ていると当たり前すぎて鈍感になってしまっているが、



こんな平凡な田舎に、また来て欲しい」「気軽に『今日行くで』といって来てもらえるところでありたい」「ここを『行きつけの田舎』にして、また疲れたら帰ってきて」といった温かい言葉が返されました。同時に、高齢化が進み田畑を耕作する後継者が不足して田畑が荒れ始めている現状と、そのような田畑を緑にしたいという強い思いが語られました。

最後に

「田舎」には、二つの側面があります。一つは、壊さなければならない田舎。封建的で、家長制や家制度、あるいは排他的な側面です。もう一つは、守り受け継ぐべき田舎。これまでに培われてきた、自然の中で暮らす知恵や技術、生活文化などです。里山ねっと・あやべでは、様々な人々との交流を通じて、綾部の3つの力を感じてもらい、その人と共に受け継ぐべき田舎を保全しようと動き出しています。

そこに住んでいる人にとっては何の変哲もない風景や暮らし。でも実はそこに、失ってはならない地域固有の自然や風土、そこで暮らすための知恵、受け継いできた文化、人々の気風があります。そして、それを求めている人が増えています。「何の変哲もない風景や暮らし」こそが、これからの時代、農村の「ちから」になるのだと思います。その「ちから」は、それを求める人のためになるだけではなく、めぐりめぐって、そこに住んでいる人にも、よい影響を及ぼしてくれるのではないのでしょうか。

シンポジウム トキを軸にした島づくり

平成13年10月19日(金)～20日(土)

主催:環境省、新潟県、佐渡市町村会、トキシンポジウム実行委員会

後援:農林水産省、佐渡青年会議所

平成12年度から始まった「共生と循環の地域社会づくりモデル事業(佐渡地域)」は、約一年半を経過しました。この事業は、里の生き物であるトキの野生復帰をスローガンに掲げ、その生息環境(自然環境、社会環境)をつくりあげようとする中で「共生と循環の地域社会」の形成を目指してきました。今年度から新潟県も、トキを指標に地域に循環型社会を定着させようと「トキの島づくり事業」を開始しました。第二回トキシンポジウムは、国と県、市町村会の共催で「トキを軸にした島づくり」をテーマに開催しました。

分科会は「自然環境の復元」「トキとこれからの農業」「活力ある島づくり」、地元の子どものための調査発表を含む「トキ博士講座」の4つを設けました。

今年度のシンポジウムは、トキへの関心の高まりから約350名が集まり、分科会では活発な意見交換がなされました。

なお、詳細な報告書は、別途発行致します。報告書ご希望の方は、里地ネットワークまでご連絡ください。

基調講演1「トキと共に生きる社会をつくる - 霞ヶ浦のアサザプロジェクト」では、NPO法人アサザ基金代表理事飯島博さんから、霞ヶ浦での経験を元に、持続可能な社会づくりについてヒントをいただきました。

アサザ基金では、霞ヶ浦の水質浄化を目的に、そこにもともとあった水草であるアサザの栽培と植え付けをはじめました。しかし、定着させるには消波堤を設ける必要があることがわかり、昔ながらの技術から学んで木の枝で粗朶をつくる事業に着手。そのための材料を、霞ヶ浦の水源の森の整備により調達することとし、森林整備を行う会社を設立しました。また、流域には放棄田が多いことから水田の管理も請け負って行っています。さら

にこれらの事業は、行政、森林組合、農協、学校を、NPOが、生活者の発想・視点でつなげています。「自己完結せず次の事業に繋がる事業をすること、そこに暮らす人たちの産業をつくること」が大切であるという指摘がありました。この報告を踏まえ、「トキは当たり前の自然、里山という日本の文化を復興させることで取り戻すことができる。それは昔に戻ることはない。人と人、組織と組織、モノ、カネの循環する動きが新しくできてはじめて実現できる。他の人や組織と、活動の場を共有することが地域作りに繋がる」との提言がありました。

基調講演2「中国におけるトキ保護の取組について」では、中国のトキ保護の第一人者で日本側との窓口でもある中国陝西省野生動物保護協会事務局長の曹永漢さんから、中国でのトキ保護の方法について報告をいただきました。まず保護組織については、国、省・市を含め、体系化・完成した組織ができており、「コーチン」という、地域ごとに行政部門間を巡回するトキ保護専門員がおり、保護に関する責任制を敷いています。トキ保護の実際に関しては、繁殖期、育雛期、雛の成長期、巣立ってから、とトキの生態と生育状況に即して観察・保護策を講じています。子どもたちを含む地域住民への普及啓発や生息環境の保全のための経済的支援についても報告がありました。

第1分科会「トキ博士講座」は、子どもたちの分科会です。まず佐渡トキ保護センター長・近辻宏帰さんから今年の繁殖について、日本鳥類保護連盟総務室長の杉本吉光さんから中日のトキ保護協力の経緯について報告をいただきました。その後地元小中学校の生徒から、それぞれの取り組みをもとに発表がありました。これまでの

各学校での独自の調査や、身の周りの水辺にどんな生物がいるか調べようという「水辺の生物調査」の活動報告がありました。毎日暮らしている場所を改めて見なおし、その豊かさに気付いたこと、また調査を通してトキの野生復帰に向けて自分たちにできることは何か考えたことなどを発表してくれました。

第2分科会「生息環境の復元」では、阿寒国際ツルセンター代表取締役の松本文雄さんによるツルの先進事例報告と自然環境研究センターの邑井徳子さんによる、これまでに佐渡で行われた水田の餌生物の調査報告をうけ、討論を行いました。参加者・パネラーからは、溪流の再生、小魚道設置など農業現場における物理的条件の改善、農薬影響調査の実験的条件設定の必要性、営巣地となる里山の現状と保全への課題、トキの生態を考慮した上での対策考慮の必要性等の意見が述べられました。また、これらの意見がでるなか、農業等の社会環境と自然環境で別々に議論するのではなく、同じ土俵で総合的に考えるべきとの指摘もありました。

第3分科会「トキとこれからの農業」では、山形置賜産直センター代表・平田啓一さんから、農薬や除草剤を使わない稲作技術について、民間稲作研究所代表・稲葉光國さんからは米ぬか・大豆除草と圃場内ピオトープの提案を、吉川町・上野泰弘さんからは棚田オーナー制度の実践報告をいただきました。これを受け、参加した農家からは、「トキの野生復帰の条件整備より、農家が農業を続けられる状況」、「現在の圃場整備の状況では、野生復帰といわれても矛盾する」などの率直な意見も出ましたが、「いきなり全島でなく、やりやすいところからモデル地区を作ろう」「有機栽培米の需要は高いので消費者側も農作業を手伝いたい」などの意見が出されました。

第4分科会「活力ある島づくり」では、まず屋久島のエコツアー専門会社・屋久島野外活動総合センター代表取締役・松本毅さんから自然環境をどう生かすかについてお話がありました。ツアーでは生態系を支える小さな生き物一つ一つの価値について情報提供していること、それに伴い、料金をガイド一人あたりだけでなく参加者1人あたりで設定していること、地域の宝物探しが産業に

繋がることを、経験を元にお話しいただきました。そして「エコツアーとはこちら側から価値観を打ち出すことだ」との提言もありました。

続いて四賀村づくり株式会社・橋本和加さんから、クラインガルテン事業の設立経緯やシステム、都会との文化交流がもたらす効果について報告がありました。「佐渡は、自然や先人の残した文化があまりに豊かなため、何かしなければという意識がないのでは」との指摘を受けました。

最後に里地ネットワーク事務局長の竹田純一が、今まで行ってきた、地元学や水辺の生き物調査について報告しました。その上で、ヨソモノの「びっくり」が地域の文化であり、その物語を確認し価値にかえていくこと、その価値をなるべく多くの人で共有することが、地域の活力を生むことになると指摘させていただきました。その後、先進事例の組織形態や経済的しくみについて、参加者からさかんに質問が寄せられました。

2日目はエクスカッションとして、次の二つのコースがあり、それぞれ約40名が参加しました。

1) トキの野生復帰をたずねて

佐渡島総合開発センター発 トキの森公園 国仲平野の田んぼ 清水平(昭和42年~平成5年までのトキ保護センター。当時餌場の一つでもあった) 両津市椎泊谷平(佐藤春雄先生がトキの観察に通った場所) 片野尾(最後の5羽捕獲地。同地区の大平山は最後のねぐら) 野浦(昭和46年以降の営巣地の一つ。公民館で野浦の方々から取組の紹介) 佐渡汽船両津ターミナル

2) ケビン・ショートの里山自然観察会(久知河内集落)

久知河内は、小佐渡山脈東部の生椿付近を水源とし両津湾に注ぐ、久知川流域の地区です。ホテルが有名で、集落ぐるみでホテルのすむ川の環境保全を行っています。農業においても農薬の使用などをおさえ、生産する米を「ホテル米」として都市部に流通するなど、環境と農業との共生においても先進的な活動を行っている地域です。ここで、日本の里地里山の自然と文化に明るいケビンさんと集落の方々の案内で、川沿いに自然観察会を行いました。下流はコンクリート護岸されていますが、上流域の休耕田とその周辺の森林の状況、そして集落の方々の取組みは、トキ野生復帰が現実のものであることを教えてくれます。

農林水産省「人と自然が織りなす里地環境」事例調査への協力のお願い

日頃、里地ネットワークの活動に関して、ご指導、ご支援いただきまして誠にありがとうございます。本年度、兼ねてから懸案であった、農村と環境、面としての環境保全のしくみをどのように構築していくかという点について、スポット的な環境保全ではなく、農村集落全体をどのような方向に向けるべきかという検討を、本事業で行わせていただくこととなりました。この検討の結果は、全市町村の農村振興担当者に配布される「行政の手引き」と「検討委員会報告」という形でまとめていきます。

これまでの反収増産型の農業政策から「環境への調和」という理念を盛り込んだ食料・農業・農村基本法の趣旨にのっとり、生物多様性への配慮、環境と文化への配慮を重視した方向へと転換させる一つの道しるべになればと願い本事業に取り組みさせていただいております。

第1回（佐渡におけるトキの取り組み）第2回（豊岡市におけるコウノトリの取り組み）第3回（宮城県田尻町におけるマガンの取り組み）等の現地調査を踏まえ、12月12

日に第4回目の検討委員会を環境省で行いました。この委員会では、愛知県美浜町（里山保全事業、炭焼きの里と半島内流通の取り組み）三重県藤原町（屋根のない学校と集落営農、和菓子などの取り組み）熊本県宮原町（情報銀行と里地公園）岩手県西和賀地域、蕪栗沼、島根県大田市などから事例報告をいただき、生態学の大島先生、各国の国立公園行政に精通する瀬田先生、除草剤を使わない稲作を提唱する稲葉先生、農業水利の宇都宮大学の水谷研究室の鈴木さん、自然観察会でおなじみのケビンショートさん等で検討を行なわせていただきました。（悪天による飛行機の都合等で、近自然工法の福留先生、環境工学の内藤先生は残念ながらご欠席されました。）

里地ネットワークの会員の方々、アドバイザーの方々におかれましては、大変ご多忙中かとは思いますが、本趣旨に照らして優良な事例をご存知でしたら、別紙のアンケートにご回答いただく形で、ご協力いただきたくお願い申し上げます。

下記の点について、先進的なものの中から、ユニークで示唆的な事例の調査を行います。

- (1) 生活として管理できる多様な里地担い手の導入
- (2) 里地環境の保安全管理と経済的・持続的価値の付加（内発的動機付け）
- (3) 里地機能を核とした圏域づくり
- (4) 里地担い手と地域住民との一体感の形成及び村構造の多様化への対応
- (5) 里地整備のあり方及び公的 management・支援のあり方（NGOを含めたシステムづくり）
- (6) いきものとの共生が抱える課題と解決方法

事例案は次ページをご参考ください。

分類(暫定)	調査対象		主な活動・事業主体団体	報告者
魚類・両生類と共に織りなす里地環境	石川・秋田	イトヨ保護活動	-	-
	宮崎県竹田町	イワメ保護活動	-	-
	三重県藤原町	古田地区屋根のない学校、集落営農	(有)藤原ファーム	近藤正治
	高知県高知市	四万十川流域連携	四万十ドラマ	梅原真
昆虫と共に織りなす里地環境	高知県中村市	トンボ王国	社団法人トンボと自然を考える	杉村光俊
鳥類と共に織りなす里地環境	新潟県佐渡島	トキの野生復帰	里地ネットワーク	竹田
	兵庫県豊岡市	コウノトリの野生復帰	豊岡市教育委員会	佐竹節夫
	宮城県田尻町	蕪栗沼 湿地の生物多様性保全	NPO法人蕪栗ぬまっこクラブ、	呉地正行
	島根県大田市	三瓶山野焼きと畜産	水と緑の連絡会議	高橋泰子
	熊本県阿蘇	草原・森林・農地の保全と畜産	阿蘇グリーンストック	佐藤誠
植物と共に織りなす里地環境	岩手県湯田町	里山の植物の保全	カタクリの会	瀬川強
	秋田県	鳥海山ブナ植樹	鳥海山にブナを植える会	須田和夫
	香川県	「どんぐり銀行」による森づくり	どんぐり銀行	-
	山口県秋吉台	草原の保全	-	秋吉
	北海道小清水	原生花園、湿地の生態系の復元	-	小清水
子ども達へと伝える里地環境	神奈川県鎌倉市	里山環境を利用した子育て	-	竹田
里地環境を保全する人々	愛知県美浜町	炭焼きの里	-	杉浦剛
	埼玉県小川町	有機農業と自然エネルギーのまちづくり	自然エネルギー事業協同組合レクスタ	桜井薫
	長野県飯山市	小菅地区の小菅の里づくり	小菅むらづくり委員会	鷲尾恒久
	三重県鈴鹿市	鎮守の森復活作戦	鈴鹿里山倶楽部	永戸栄治
	京都府綾部市	里山力・ソフト力・人財力の地域づくり	里山ねっと・あやべ	塩見直樹
	埼玉県三富地域	平地林の保全と農業	落ち葉野菜研究グループ	早川光男
	埼玉県三富地域	平地林の保全	おおたかの森トラスト	足立圭子
	千葉県印西市	振興住宅地近くの里地環境保全	ラーバン千葉ネットワーク	鈴木均
	岩手県沢内村	暮らしの文化伝承、エコミュージアム	西和賀文化伝承保存協会	広瀬龍一
	北海道	自然体験学校活動の里地環境づくり	北海道自然体験学校NEOS	高木晴光
	岩手県山形村	バッテリー村の地域づくり	バッテリー村	木頭古徳
	山形県戸沢村	戸沢村里地環境を活かした村づくり	戸沢村立戸沢小学校	斎藤正昭
	山形県朝日町	養蜂の森づくりによる里地環境保全	ハチ蜜の森キャンドル ビーズファーム	安藤竜二
	山形県最上町	最上町における里地環境づくり	最上の荘	菅博
	静岡県富士宮市		富士開拓農業協同組合	酒井良則
	北海道標茶町	住民自治による地域づくり	標茶町役場	佐藤吉彦
パトナシップ - 私的 management と公的 management を超えて	熊本県宮原村	情報銀行と里地公園	-	岩本
	高知県馬路村	ごっくん馬路村	-	-
循環・共生・参加	熊本県小国町	悠木の里づくり	小国町	宮崎暢俊
	鳥取県智頭町	ひまわりシステムのまちづくり	-	-
	北海道標茶町	住民自治による地域づくり	標茶町役場	佐藤吉彦

人と自然が織りなす里地環境基本データ調査票	
名称	
関係者名	
連絡先	
電話	
行政区	
所在地	
標高	
湧水の状況	
河川の状況	
地域の特性	
保護している野生生物	
保全している地域資源や文化	
核となる活動団体等の概況	
関わっている参加者等の概況	
過去の活動概況	
現在の活動概況	
今後のビジョン	
課題	
行政が担うべき役割	
住民が担うべき役割	
都市住民が担うべき役割	

人と自然が織りなす里地環境課題調査票	
(1) 里地環境の保全のための新たな仕組みや担い手の可能性	
(2) 活動を継続させる経済的な手だて等の可能性	
(3) 里地環境を保全していくための人や物との関わりや範囲、新たな概念の可能性	
(4) 里地環境保全のための地域住民の感情や価値観	
(5) 里地整備のあり方及び公的・管理・支援のあり方(NGOを含めたシステムづくり)	